



新連載！資産運用「茶飲み話」(1)

岡本 和久

早いもので証券界に入って43年になりました。オイルショック、貿易摩擦、プラザ合意、80年代のバブル膨張と崩壊、ITバブルと暴落、サブプライム問題、ユーロ問題、世界的な金融危機、まあ、色々ありましたね。でも、何とか生き延びてくることができました。そんな私の茶飲み話、聞いてやってください。



相場が難しいとき、「投機」はしない方がいい。ただ、相場は、いつも難しい

投機というのは偶然性にかけることです。コインの裏表を当てる。サイコロの目を当てる。結果に法則性がなく、結果をコントロールするすべがありません。コインよりは、パチンコ、パチンコよりは競馬と少しずつ分析的要素が増えていきます。

株式「投資」は結果にある程度の法則性があり、結果をある程度、コントロールする方法もあります。なぜなら株式には価値があるからです。株式を保有するということは株式の発行企業を保有することです。つまり、株主は企業の資産のオーナーです。そして、その資産は社会に付加価値をもたらしています。株主が保有する企業の資産は価値を生む資産なのです。ですから、長期的に見れば株価は企業の価値に沿った変動をしています。

しかし、株価の動きは短期になるほどランダム性が高くなります。そのランダムな動きにかけるのが投機です。うまくいっても、失敗しても「運」でしかありません。短期の相場動向は誰にもわからない。これはいつも真実です。つまり、相場の短期見通しはいつも難しい。退職後を支える運用資金をもって、荒波のなかに飛び込み、あえて波乗りをする必要はないのではないのでしょうか？

働くということは、人的資産を金融資産に変換する作業である

人生は三つのステージで構成されます。学び、働き、遊びです。

学びの時代というのは生まれてから社会にでて一人前になるまで。就職しても普通、最初の



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

10年ぐらいは丁稚のようなものですから、学びに時代は30歳のはじめくらいまででしょうか。学校で学び、自分の進むべき道を決め、その分野のプロを目指すのがこの時期です。つまり、自分というものの人的資産（あくまで金銭的な価値です）を形成する時期です。

そして、本格的に働きの時代に入ります。家庭を持つ人も多いでしょう。プロとして活躍し、自分が形成してきた人的資産を活用し、それを金融資産に変換する。金融資産形成期です。この時期は普通、ミドル・エイジと呼ばれます。ミドルの時代、毎月の給料は生活費、住宅費、子どもがいれば養育費や教育費が必要でその上、さらに退職後資金を準備しなければなりません。まさに、「ミドルはつらいよ」です。

そして、定年退職したら今度は遊びの時代です。遊びと言ってもただだと寝ころんでテレビを見ているというのではなく、自分が本当にしたいことを自由にして、世の中に貢献してゆく時期です。このステージでは働きの時代に形成した金融資産を活用します。そして、若い人たちに生きざまをみせてあげる。つまり、次の世代の人的資産形成を行うのです。

こうしてみると人的資産と金融資産の、形成と活用によって人生が出来上がっていることがわかります。そして、そのサイクルは世代を超えて続いていくのです。

資産運用とは将来の生活リスクを、コントロール可能な、いまの投資リスクに変換することである

退職後の生活が不安。だから資産運用が必要と言われるけど、やっぱりリスクのある投資は値下がりが心配。老後が不安、でも投資も不安、しかし、預金だけで良いのかこれも不安。これが本音でしょう。だからと言って何もしないのは退職後の生活リスクをそのまま放置しているだけです。

資産運用というのは、将来の生活リスクを、投資のリスクに変換することなのです。投資のリスクは、完全にではないにしても、ある程度、コントロールできます。適切な資産配分に基づきグローバルに十分分散されたポートフォリオを長期で保有する。そして、できるだけコストの安い投資対象を選ぶ。

何もしなければ退職後の生活リスクがそのまま残ります。投資に伴うリスクを理解することで、目先の投資リスクに対する耐久力がつきます。そして、それが老後の生活リスクを削減する方法でもあるのです。資産運用とは将来の生活リスクを、現在のコントロール可能な投資リスクに変換することなのです。